

櫻井治男著

『地域神社の宗教学』

板 井 正 斉

神社は地域の中心的存在である——とは、様々な場面でよく耳にするフレーズである。神社関係者や研究者にとつては、大変使いやすく、かつ共感を得やすい前提でもあり結論にもなりえる。理想的で万能に見える言説だが、果たしてそのエビデンス（根拠）は何なのであるうか。当たり前のことを真剣に考えてみる時、意外と手に取る先行研究の少ないことに気が付く。ここでのいうエビデンス（根拠）とは、高度な神道神学に基づく解釈や、宗教者・研究者の貴重ではあるけれども主観的な主張と一線を画して、客観的な実証研究の結果を意味する。

少ないながらも不可欠な先行研究の一つが櫻井治男の一連の研究であろう。著者の関心対象は、「近代以降の地域神社にあるとともに、それを通して「神社」と神社的性格

を持つ「神社」の関係性及び地域住民との関わりを、当該地域の社会的文化的脈絡と社会全体の大きな動きとの中で理解を試みる（vii頁）ことである。とりわけ明治末年の神社整理をめぐるまとめられた『蘇るムラの神々』（大明堂出版、平成四年）が学界に留まらず幅広く一般にも高く評価されていることは周知のとおりである。同書の刊行から十八年を経て、このたび上梓された『地域神社の宗教学』は、畔上直樹氏の紹介にあるように、「このような問題に少しでも興味をもつものにとつて久しく待たれていた（神社新報三〇五九）」一書といえる（著者は前著タイトルを「いささか奇抜（三七九頁）」だったと本書あとがきで述べているが、タイトルに魅了されて次著を心待ちにしていた方々も多いのではないだろうか。かくいう評者もその一人である）。

さて本書を紹介するにあたり、光栄にもその役を仰せつかった評者が、著者から教えを乞うている立場であることであらかじめご了承いただきたい。その意味で徹底した書評には到底至らない。それでも前著から本書刊行までの間、幸いにも著者の最も身近で学ばせてもらった立場から著者や本書の魅力を申し上げてみたい。

まず本書の構成は、前著以降の論考を中心に全体で十三本が収めている。その内訳を目次から概観すると次のとおり（副題を除く）。

第一編 近代日本と地域神社への視角

第一章 近代日本の神社信仰と地域社会

第二章 明治初期の「神社」調べ

第三章 明治初期の「神社」調べと地域神社

第二編 神社整理と地域の神社復祀

第一章 「家郷」をめぐる地域神社と共同性

第二章 神社合併と稲荷社

第三章 地域社会の変動と宗教伝統

第四章 氏神鎮守社の再生

第五章 地域神社の遷宮の諸相

第三編 コミュニティの「神」と聖所

第一章 新しい共同体における神社の創建と共生意識

識

第二章 地域コミュニティを廻る「お燈明」

第三章 地域コミュニティと聖所

第四編 近代神道と地域社会の受容

第一章 地域社会における神葬祭の受容とその展開

第二章 神宮教会所の顛末

第一編では、近代以降の神社整理の流れやそれに伴う「神社」自体の概念形成と、それが地域においてどのような受け止められたのかという問題を神社資料等から論じている。前著から引き継がれた著者の最も基本的な問題意識

があらためてまとめられている。第二編では、家郷概念をめぐる地域神社の実情について、「政府の神社整理施策に対するアンチテーゼ（二一四頁）」の一つとして著者が独自に整理する「神社復祀（神社の復旧再建）」の事例等から新たな視点に基づいた考察を加えている。第三編は、共同体の変容という社会的な背景の中で、神社にかかわる聖なるものが、地域の現代的な共同性に与えている影響を述べている。第四編は、唯一、前著以前の論考が加えられている。共同体と地域神社との関係性を捉える上で、近代神道における神葬祭や神宮教会の脈絡も見逃せないトピックであることを最後に指摘している。

全体を通じた本書の魅力を三点にまとめてみたい。

一つ目は、著者の分析手法である。近代のいわゆる神社行政資料を対象にするのが著者の特徴の一つである。膨大な資料を詳読し、一見すると紋切り型の行政資料にもその地域の人々の神社観を丁寧に見出している。資料の限界性や、膨大であるがゆえの普遍化には課題があるものの、神社がそれを取り巻く地域社会との関係性において「動態的な存在（五八頁）」であることを明らかにしている。それに加えて、精緻なフィールドワークが行われる。本書においては、前著で必ずしも十分ではなかった伊賀名張地域への調査が反映されたことで、三重県における神社整理の全体

像がより明確になった。

著者の調査に幾度となく同行する機会を得た者としては、地域の人々の言葉一つひとつを大切に扱われる真摯な姿勢と、納得がいくまで何度でも通われる貪欲さ、何よりも著者自身が現地調査を楽しんでおられる姿には学ぶべき点が多い。

二つ目は、一つ目の分析手法が、原田敏明・西川順土先生、そして櫻井勝之進先生へと脈々と受け継がれた神社研究のスタイルであることによる。著者は、「宗教学の本格的な手ほどきを受けて研究をスタートした者ではない（三八四頁）」というのも、言葉には出されないが原田学という神社を対象とした独自の学問体系の継承をおくゆかしき意識されているのではないだろうか。本書序において紹介された島根県浜田市の八幡宮が、櫻井勝之進先生と縁の深い神社であり地域であり、かつまたその氏子による秋祭りの準備をさりげなく冒頭に述べられていること等にもそのような想像を強くする。ちなみに八幡宮の社務所には勝之進先生の「神人和楽」の書が掛けられているとお聞きしたことがある。まさに原田学に基づく著者の問題関心を端的に表現した言葉といえよう。

しかしながら連綿とただ継承することが原田学ではない。常に神社を取り巻く社会との関係を重視してきたその

問題意識は、著者をして「神社の時間的・空間的広がり」と「神社の性格的広がり（vi頁）」という新たな領域へと研究は深化された。この点が三つ目の魅力となる。特に第二編第一章の「家郷」をめぐる地域神社と共同性」（九七―二三頁）では、「ムラの神社」と地域社会との現代的な関わりを次のような視点から論じている。

「実感」や「生活に密着した」という問題は、個々人の領域としてだけで捉えられるものではなく、そこに「私たち」の社会のあり方が常に関わっていると見てよからう。その場合に、私たちを「（私たち）」としてつなぐもの」や「（私たち）」たらしめているもの」について、多様な角度からの検討が必要である。（九八頁）

その上で、あくまでもこれまでの分析手法を駆使しながら、「ムラの神社」には家郷社会の内的なつながりや家郷を想う人々との回路として一定の役割を果たしている（一二〇頁）ことを指摘する。本章によって、まちづくりや支え合い、絆といった現代的な社会課題について、神社をめぐる現象から論じる斬新なパースペクティブが示されたといえる。第三編第二章「地域コミュニティを廻る「お燈明」や、同第三章「地域コミュニティと聖所」でも同様の視点から考察が加えられている。また、本書で創出された

著者による新たな研究領域が、いずれも伊賀名張地域をフィールドにしていることも見逃せない。平成十年度から二十二年度まで皇學館大学が名張の地で「神道と福祉」の学びを深めさせてもらったことと、著者の研究深化には関係がある。時局に翻弄されながら、学内行政でも要職にある著者は、超多忙の中で本書の執筆・校正を進められた。それでも間隙を突くように、あの小型四駆でフィールドへと出かけて行かれる後姿に、いつもの柔和な師とは違った執念のような側面を垣間見た気がする。残念ながら名張での時間は限られたものではあったが、その中で著者のあらゆる思いを〈根付け花咲け〉と奔走されていたようにも思う。

思い返せば、原田敏明も戦後、神宮皇學館大学廃学の過中で大学存続に東奔西走されながら、あの重厚な研究成果を積み上げられていったという。本書がこの数年間の激務中でまとめられた事実とその学恩のご縁を重ね合わせてしまふのは評者だけだろうか。

書評とは名ばかりの程遠い内容にまで拡散してしまい恐縮だが、評者が知る限りの本書刊行の背景を述べさせていだいた。純粹に研究成果を批評することの方が読者の求めておられる内容に近いことを認識していながらも（きつと著者もそれを強く望まれるだろうが）、地域神社の人間臭さ

を明らかにしようとする本書だからこそ、お叱りを覚悟の上で、著者の人間味をも踏まえながら一つひとつの論考をお読みいただきたい。

最後に、本書で残された課題を一つ挙げておく。それは近代のエポックから地域神社を考察することが、現代的な地域と神社の関係性を見ていく上でも重要であることは本書によってさらに実証的に理解を深められた。だからこそ、より現代的な社会課題へ特化した言及を期待してしまう。現代において神社が地域の中心でありえるのかどうか、ありえるとすればそれは具体的にどのようなことなのか、ぜひご教示を賜りたい。この場を借りて「先生、次の本も楽しみにしています」と公言しておこう。

（弘文堂、平成二十二年十二月刊、三八四頁、A5判、五〇〇〇円）

（皇學館大学現代日本社会学部准教授）